

長野県松川町・北の城遺跡出土の
下呂石製尖頭器とその含意

藤山龍造・堤 隆



巻頭図版 北の城遺跡の下呂石製尖頭器

長野県松川町・北の城遺跡出土の 下呂石製尖頭器とその含意

藤山龍造^{1*}・堤 隆²

要 旨

本論の目標は、長野県松川町・北の城遺跡から出土した下呂石製尖頭器を起点として、旧石器時代と縄文時代の端境期における尖頭器生産とその空間的展開を考察することである。

北の城遺跡から出土した4点の尖頭器は、これまでほとんど注目されてこなかったが、通常の尖頭器とは異なる技術的・形態的属性を備えている。これらの尖頭器は、いずれも最大長が100mmを大きく超えていて、空間的にまとまって出土している一方で、その製作に関連すると見られる資料は極めて乏しい。斜軸剥片を素材として、両面調整によって木葉形～柳葉形へと加工されるが、基部にはほとんど加工が見られず、この部分では平面形が略U字状を呈する点に特徴がある。加えて、天竜川流域という地理的条件にもかかわらず、すべて下呂石を用いて製作されている点は、その一般的な分布圏から逸脱する事例として注目される。

筆者がとくに焦点を当てたのは、これら類例の乏しい尖頭器の時間的な帰属と、その資料的な位置づけを評価することであった。石材選択、素材選択、および二次調整において、これら4点の尖頭器は一体の資料群と見なされ、縄文時代草創期における隆起線文土器群の段階に位置付けられる可能性が高い。なかでも、斜状並行剥離に類する調整が一部に認められる点は、柳又型有舌尖頭器の製作に関わる資料であることを示唆しており、上記の時間的位置づけと矛盾しない。言葉を換えるならば、これらの尖頭器は一見すれば独立した完成品のように見えるが、実際には有舌尖頭器の未成品である可能性が高い。

このような視点に立つとき、西日本を中心に広がる石器群においては、石材産地を起点とした石器生産と運搬形態が、東日本と同列には説明できない可能性がある。隆起線文土器群の段階には、狩猟採集民の生活圏が大きく縮小し、それぞれの小地域で在地石材に依存した石器生産が顕著になってゆく。こうした方向性そのものは西日本の石器群でも基本的には共有されると考えられるが、有舌尖頭器をブランクの状態で遠隔地へ運搬していた可能性が浮かび上がってくる。そのうえで在地石材を補給した石器生産が展開されていた可能性が高く、北の城遺跡の下呂石製尖頭器は、こうした石材供給の具体的な一断面を示している。

キーワード：縄文時代、中部高地、尖頭器、石器製作、遺跡間連鎖

1. はじめに

中部高地を流れ下る天竜川の流域には南箕輪村・神子柴遺跡（林編 2008）や駒ヶ根市・小鍛冶原遺跡（堤編 2009）が位置し、これらを中核に神子柴系石器群の探究が進められてきた。旧石器時代から縄文時代への移行過

程を検討するうえで、本地域は長期にわたって重要なフィールドであり続けてきた。そうしたなかで、学界にほとんど周知されていない重要な石器群が確認された。それが松川町資料館に展示されていた北の城遺跡出土の両面調整尖頭器4点である。この確認を受けて、本論ではそれらの尖頭器を起点に、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての石器生産をあらためて考察することにし

1 明治大学文学部 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

2 明治大学黒耀石研究センター 〒101-8301 東京都千代田区神田猿樂町1-6-3 猿樂町第三校舎

* 責任著者：藤山龍造（fujiyama@meiji.ac.jp）

受付：2025年12月9日 受理：2026年2月3日

た。

筆者の一人（堤）は、天竜川流域における一連の石器群調査を続けるなかで、2024年10月1日に松川町資料館を訪れ、展示されていた北の城遺跡出土の石器を実見した。これら4点は1971年の道路工事に伴う緊急発掘調査で出土したもので、翌年には松川町教育委員会による報告書が刊行されている（宮沢ほか編1972）。半世紀以上を経て町の指定文化財として保存されてきたが、学術的な注目はほとんど集めてこなかった。実見の結果、その質感から下呂石製の可能性が高いと判断され、科学的手法による原産地推定を試みることとなった。明治大学黒耀石研究センターの可搬型蛍光X線分析装置（p-XRF）による非破壊分析を町に申し出たところ、2024年11月6日付で正式に許可が下り（6松教生第105号）、原産地推定を実施するとともに外部委託して3D（PEAKIT）画像を作成した。その後、2025年3月6日に資料を返却し、分析結果を踏まえて本論で報告するに至った。

この間、もう一人の筆者（藤山）は、堤から報告を受けて、黒耀石研究センターで借用中の尖頭器を実見することになった。報告を受けた直後は神子柴遺跡や小鍛冶原遺跡と同様の資料と想定していたが、その後の観察を通じて、すぐさまその特異性に気づくことになった。それらの尖頭器はいずれも木葉形～柳葉形を基調としているが、基部に素材面を残し、その部分がしばしば略U

字状を呈する点に特徴があった。しかも、素材選択から二次調整に至る斉一的な技術もこの地域に一般的なそれとは異なっており、同じ土俵で議論できないことは明らかであった。どのように評価するにせよ、下呂石の排他的な使用に加えて、それらの残渣類が乏しく、また4点の尖頭器が空間的にまとまる点も含めて、資料群の再評価が必須と判断された。その後、関連資料の実見を経たうえで、ここに現時点の評価を報告するに至ったわけである。

本論では、これら北の城遺跡出土の両面調整尖頭器に見られる諸属性を整理し（2）、その時間的な位置づけを検討すると同時に（3）、資料の性格を評価する。そこでは西日本を中心に広がる石器群との関連性も視野に入れたうえで、当該尖頭器が天竜川流域に残された経緯を議論する予定である（4）。あらかじめ結論を示すならば、北の城遺跡で出土した4点の尖頭器は、柳又型有舌尖頭器のブランクであった可能性が浮かび上がってくる。さ

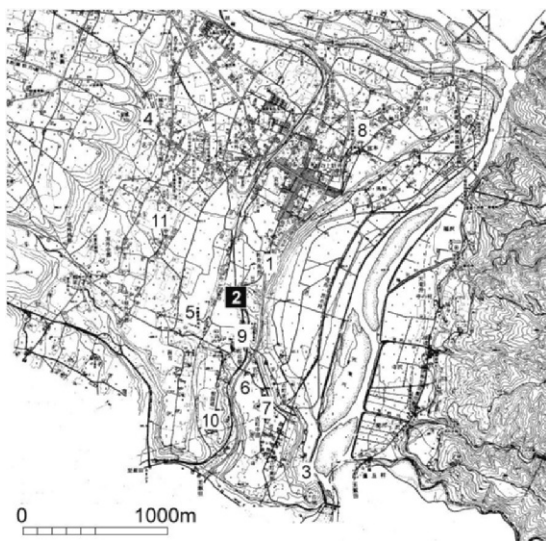


図1 北の城遺跡（No.2）の立地状況（宮沢ほか編1972）

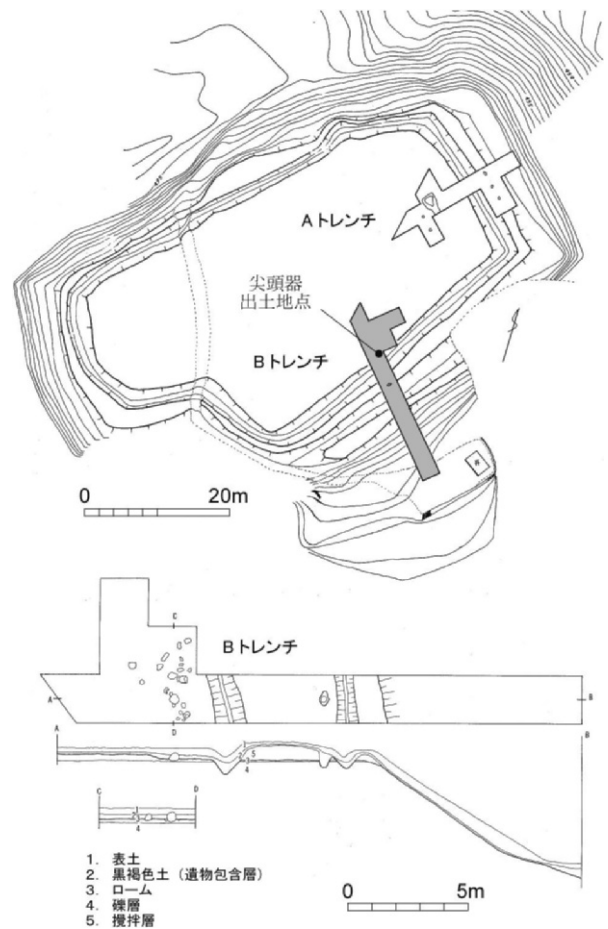


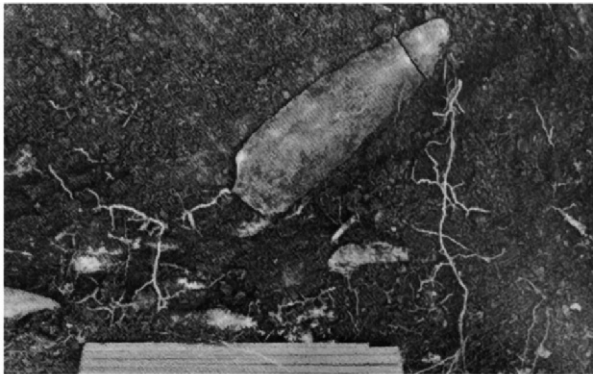
図2 北の城遺跡トレンチ配置図（1971年調査）
（宮沢ほか編1972）



写真A: 尖頭器の出土地点と「磔群」



写真B: 尖頭器（資料No.2, 4）



写真C: 尖頭器（資料No.1）



写真D: 尖頭器（資料No.3）

図3 北の城遺跡における尖頭器の出土状況（宮沢ほか編 1972）

らに言えば、下呂石の原産地でそれらのブランクを生産した集団が、飛騨山脈や木曾山脈を越えて天竜川流域に進入し、一時的に滞在した可能性を想定している。

なお、本論の作成にあたっては、「1」を藤山と堤が担当し、「2-1」および「2-3」は堤が分担した。それ以外の箇所はすべて藤山が執筆したことを断っておく。

2. 北の城遺跡の尖頭器とその特徴

2-1 北の城遺跡の概要と石器群の出土状況

北の城遺跡は長野県下伊那郡松川町元大島字上新井に所在する。天竜川に臨む河岸段丘の舌状に張り出した地形の突端に位置し、天竜川からの距離は約700m、標高は約500mを測る（図1）。遺跡は、国道153号線の改良工事に伴って、当時松川中学校の教諭であった考古学研究者・宮沢恒之を団長として発掘調査が実施された。「北の城」と名付けられたように、中世城郭として調査

され、実際に堀などが発掘されたが、そのBトレンチ（図2）で検出されたのが今回報告する石器4点である。

石器の出土状況に関しては、発掘調査報告書に「Bトレンチの内側の壕の至る所に人頭大から拳大の円礫が配置されその間4本のサヌカイト製のみごとな両面調整の神子柴型ポイントがデポー状に発見された。段丘端部であり、特殊なチャシ状の性格をもつものであろう」と記載されている（宮沢ほか編 1972, p.26）。4点の位置関係を示す図は残されていないが、報告書添付の調査速報には、まず尖頭器1点（資料No.3）が1971年8月7日に検出され（図3:写真D）、翌8月8日には残り3点（資料No.1, 2, 4）がほぼ同じ地点から集中して出土した（同図:写真B, C）、とある。また、速報には、人頭大の礫2個と拳大の礫が石器群を囲むような形で置かれていた、と記載されている。調査参加者の一人・小林正春（前長野県考古学会会長）に照会したところ、「半世紀前なので記憶が定かではないが、4点が50cm程度の非常に狭い範囲から面的に出土していたと思う」との説明であった。石器4点は、図3（写真A）の礫が弧を描く内

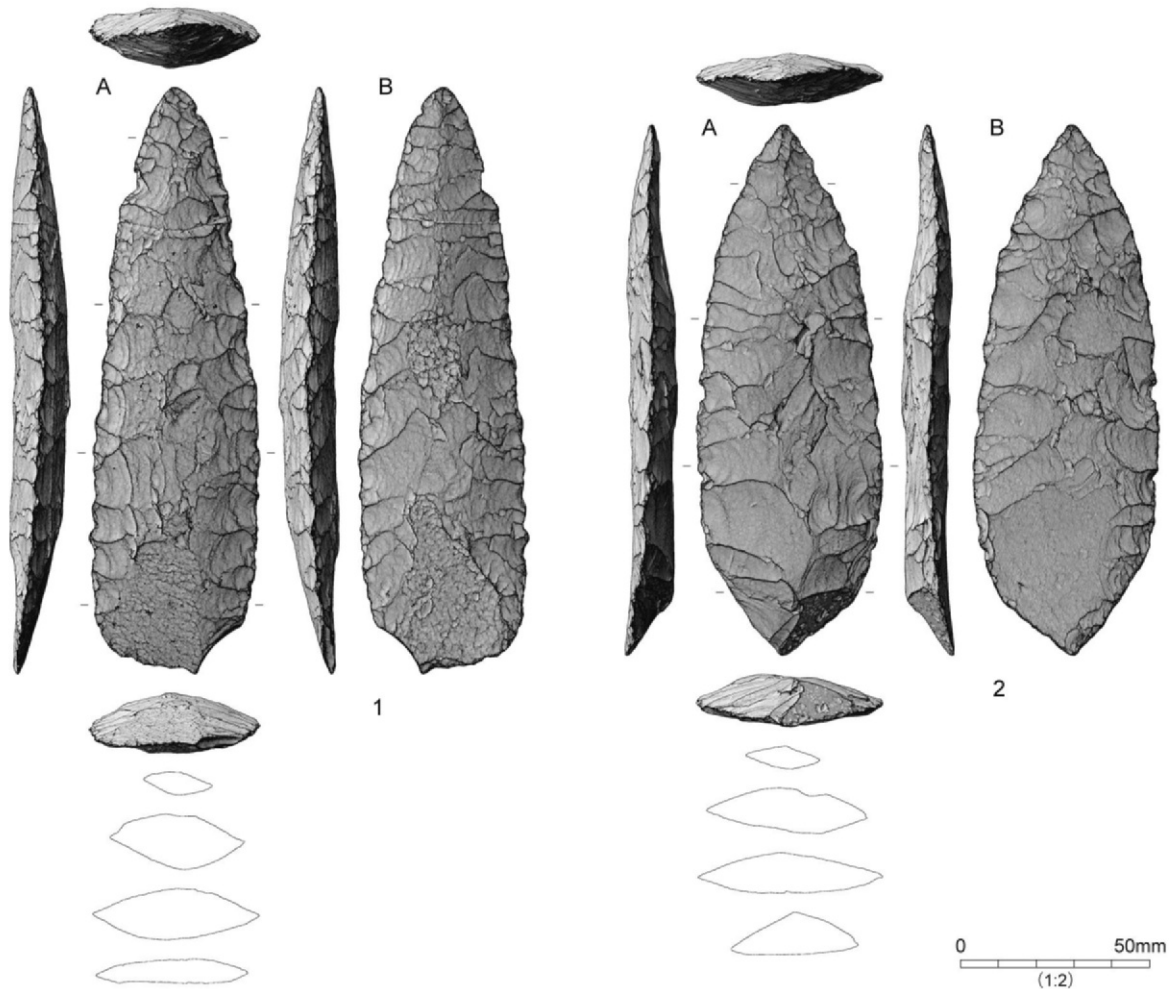


図4 北の城遺跡の下呂石製尖頭器（資料 No.1, No.2）

側（手前側）で検出された可能性がある。同図（写真B）に見るように、礫は写真上の左右にあり、石器2点（資料No.2, 4）は礫のベッドとなる地層面に並んで出土している。資料No.1, 3の写真は単独で平坦な地層面から検出されたものしかない（図3：写真C, D）。このように調査記録は限られているが、4点の尖頭器ばかりがまとまって出土した模様である。

2-2 資料の属性

本遺跡がもっとも注目されるのは、天竜川流域という地理的条件にもかかわらず、下呂石製の尖頭器が4点まとまって出土した点である（図4, 図5, 表1）。通常の尖頭器は木葉形や柳葉形を基本とするが、これらの資料は基部付近に素材面を残し、この部分で平面形が略U字状を呈する点で大きく異なっている。後述するように、いずれも下呂石の石理に沿って剥離された斜軸剥片を素

材とする可能性が高く、この点でも技術的斉一性が認められる。それぞれ下呂石を選択し、在地石材が含まれない点も特筆されるが、これは肉眼観察のみならず蛍光X線分析でも裏付けられている（2・3）。旧報告書の記載内容に依拠する限りでは、これら下呂石製尖頭器に付随する残渣類は確認されていない模様である。いわゆる“デポ”と評価するか否かは別として、中部高地のみならず列島全体を見渡しても、通常の尖頭器とは異質な側面を示している。

なお、以下ではPEAKIT画像に基づいて尖頭器の諸属性を説明するが、素材面等の判別にはどうしても限界がある。紙幅の都合上、冊子版では写真図版を割愛したが、黒耀石研究センターのホームページ上に公開する電子版ではカラー写真を添付しているため、適宜参照されたい。

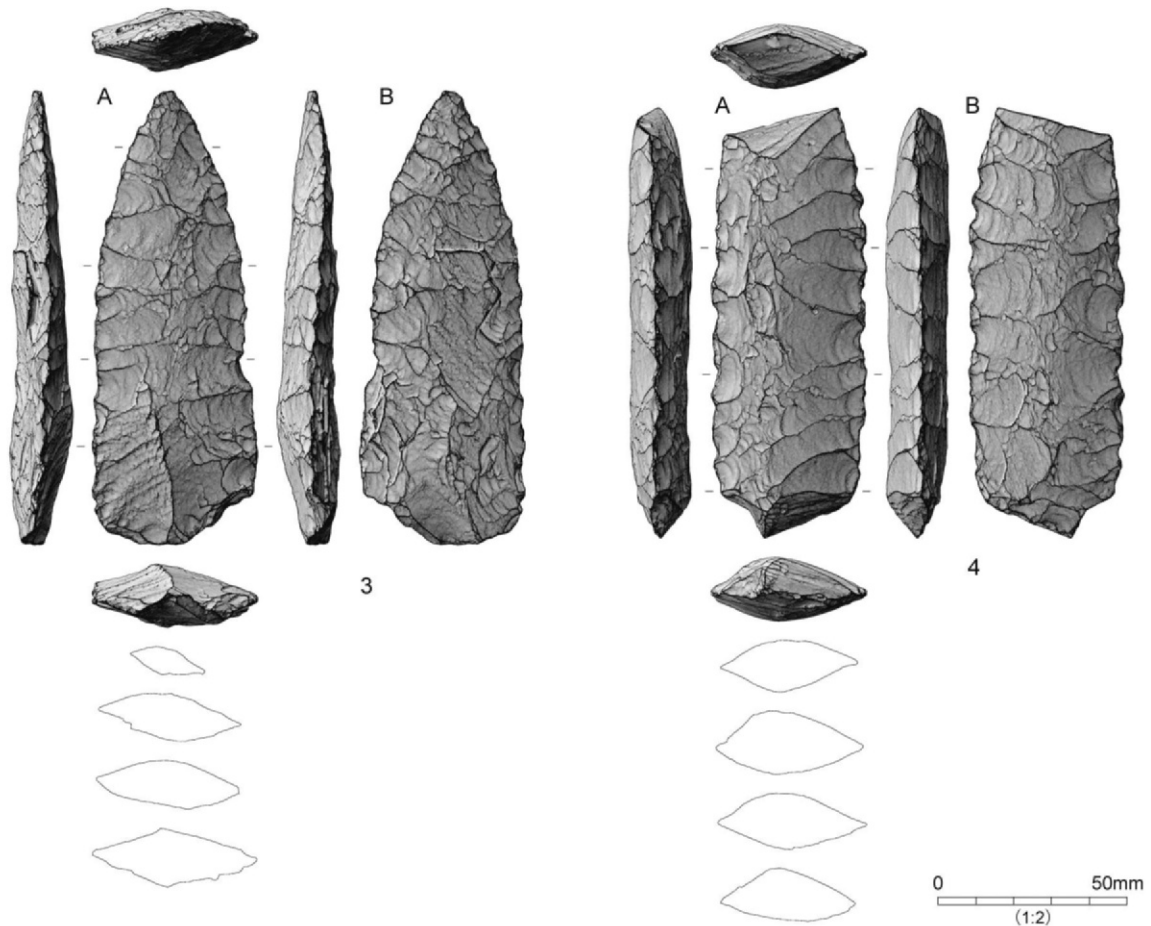


図5 北の城遺跡の下呂石製尖頭器（資料 No.3, No.4）

資料 No.1（図4：左）

基部が略U字状を呈する点を除けば、両側縁は弱い弧を描いて先端部で合流し、おおむね木葉形に近い形状を呈している。先端部近くで折損・接合しているが、基部（A面右下）の新しい破断面を除けば、ほぼ完形に近い状態である。最大長、最大幅、最大厚はそれぞれ155mm、45mm、16mmを測り、重量は93gに達するなど、本資料群のなかでは最大のサイズを誇る。基部両面に素材面が残存しており、A面には節理面（素材剥片の主剥離面）、B面には角礫由来と推定される平坦な自然面が残され、後者は器体中央部まで断続的に広がっている。これら素材面を除けば、両側縁からの平坦剥離がA、B両面を中軸線付近まで覆い、これによって横断面は凸レンズ状を呈している。これら平坦剥離には、階段状剥離がA面を中心に発生しているが、これは原石の流理構造に起因する可能性が高い。

上記の部分的な素材面から推定すると、本資料は大形

角礫から剥離された斜軸剥片を素材としていた可能性が高い。素材剥片には縞状の流理構造が部分的に発達し、自然面は明灰色、風化面は暗灰色、新鮮面は黒色をそれぞれ呈している。今回確認された4点の尖頭器のなかでは、本資料が最も粗いテクスチャを帯びていて、風化が進行することで表面のざらつきが顕著である。本資料は斜軸剥片を素材としており、A面が旧腹面側、B面が旧背面側に相当する可能性が高い。素材剥片の剥離軸を正確に復元することは難しいが、A面側を基準にすると、打点はおおむね280°～310°方向に設定され、剥離軸は100°～130°方向に走っていたことが推定される。こうした斜軸剥片の薄手の末端を基部側に残置し、それ以外の部位を両面調整で加工することによって、この特徴的な尖頭器が生産されたと考えられる。

資料 No.2（図4：右）

両側縁は弧を描いて先端部と基部でそれぞれ合流し、

全体として木葉形に近いが、基部に素材面を残置する点では他の資料と技術的共通性が見られる。B面の右側縁に新鮮な剥離面がわずかに見られる点を除けば、器体にはほとんど欠損が見られず、おおむね完形を呈している。最大長、最大幅、最大厚はそれぞれ140mm、49mm、14mm、重量は79gを測るなど、資料No.1に次ぐ大きさを示している。基部両面には加工がほとんど施されておらず、A面右下には素材剥片の自然面（旧背面側）、B面には主剥離面が残存している。これら素材面の残存を除けば、両側縁からの平坦剥離がA、B両面を中軸線付近まで覆い、これによって横断面は凸レンズ状を呈している。平坦剥離の打点付近にはネガティブバルブが発達しておらず、比較的軟質な加工具によって調整された可能性が示唆される。

A面右下に残る自然面から推定する限りでは、本資料は大形角礫から剥離された斜軸剥片を素材としていた可能性が高い。石材は緻密なガラス質で、流理構造はやや不鮮明であるが、自然面は灰白色、風化面は黒色～濃茶色、新鮮面は黒色をそれぞれ呈している。今回確認された4点の尖頭器のなかでは、本資料が最も細かいテクスチャを示し、ざらつきや斑晶の発達は乏しく、表面には珪質頁岩に類する光沢が見られる。自然面を下底面とする盤状礫ないし分割礫から斜軸剥片が剥離され、A面が背面側、B面が腹面側に対応すると見込まれる。素材剥片の打面は遺存していないが、B面を基準に打点はおおよそ50°～80°方向に設置され、剥離軸は230°～260°方向に走っていたと推定される。斜軸剥片の薄手の末端を基部側に残置し、それ以外の部位を両面調整で加工することによって、この尖頭器が生産されたことが予測される。

資料 No.3 (図5:左)

両側縁が弱い弧を描いて先端部で収束し、全体として木葉形に近く仕上げられるが、やはり基部の加工は乏しく、略U字状を呈している点に特徴がある。とくに目立った欠失は認められず、器体は完形に近い状態を良好に保っている。最大長、最大幅、最大厚はそれぞれ120mm、44mm、17mmを測り、また重量は69gと、本遺跡では中形の尖頭器に相当する。器面のほとんどが平

坦剥離で調整されるため、横断面はおおむね凸レンズ状を呈する。ただし、基部付近に素材面が大きく残るため、そこでは菱形に近い断面形状となる。基部付近の調整は限定的で、A面には器体軸にわずかに斜行する2枚の粗大な剥離面が確認され、縁辺の軽微な調整を通じて平面形がわずかにV字状に近づけられている。B面側には基部から長軸方向に剥離が入るなど、これによって基部の厚みを除去する意図があったと推定される。

本資料には自然面が残されていないため、原礫の形状を判別することは不可能であるが、A面が素材剥片の背面側、B面が腹面側に相当すると見込まれる。石材には全体的に流理構造が顕著に発達しているが、風化が著しく進んでいることもあって、全体的に粗いテクスチャが際立っている。新鮮面は黒色を呈しているが、ざらつきのある風化面は暗灰色を呈しており、ガラス質の光沢を確認することはできない。なお、本資料の基部にはB面左下の狭い範囲にわずかな平坦面が残されており(3×15mmほど)、これが素材剥片を剥離した際の打面に相当する可能性がある。この判断が正しいとすれば、打点をこの付近に設置し、剥離軸はB面基準で40°～70°方向に走っていたことが想定されるなど、やはり斜軸剥片が素材と推定される。基部のA面側に見られる二枚の剥離面は、素材剥片の先行剥離面に相当する可能性がある。

資料 No.4 (図5:右)

側縁部はわずかに湾曲して先端部に達する形状で、全体として木葉形～柳葉形に仕上げられている。基部には素材面が残され、略U字状を呈している。先端部は欠失しているが、器体のおおよそ8割が遺存している。現存する最大長、最大幅、最大厚はそれぞれ115mm、43mm、17mmを測り、また重量は83gに達するなど、その他の資料と遜色ない法量を示している。A面では右側縁を中心に幅10mm前後の平坦剥離がほぼ平行に走っており、それらは中軸線を越える範囲に及ぶなど、いわゆる斜状並行剥離に近い特徴をもつ。左側縁では相対的に急斜度の剥離が不規則に施されるなど、左右の調整方法に差異が見られ、横断面が甲高な印象を与える点も含めて、斜状並行剥離に類する。表裏両面の剥離面にはネ

表1 石器観察表

No.	器種	石材	遺存度	計測値				素 材				備 考	
				最大長	最大幅	最大厚	重量	種別	旧背面	旧腹面	打点 (旧腹面基準)		剥離軸 (旧腹面基準)
1	尖頭器 (有舌尖頭器)	下呂石	ほぼ完形	155mm	45mm	16mm	93g	斜軸剥片	B面	A面	280°～310°	100°～130°	A面：基部付近に素材面 B面：基部付近を中心に素材面(自然面)
2	尖頭器 (有舌尖頭器)	下呂石	完形	140mm	49mm	14mm	79g	斜軸剥片	A面	B面	50°～80°	230°～260°	A面：基部右下に素材面(自然面) B面：基部付近に素材面
3	尖頭器 (有舌尖頭器)	下呂石	完形	120mm	44mm	17mm	69g	斜軸剥片	A面	B面		40°～70°	A面：基部付近に素材面 B面：基部左下に素材面(旧打面)
4	尖頭器 (有舌尖頭器)	下呂石	尖端欠	115mm	43mm	17mm	83g	斜軸剥片	A面	B面	190°～220°	10°～40°	A面：基部右下に素材面(旧打面) B面：素材面なし

ガティブバルブが明瞭に残るが、それは表裏両面で近接して配置されるなど、一般的な直接打撃とは異なる加工方法を示唆している。

あいにく本資料には自然面が遺存しておらず、原石の形状を復元するだけの手掛かりは極めて乏しいと言わざるを得ない。使用石材には部分的に流理構造が見られるが、資料No.2のようなガラス質の光沢は発達しておらず、表面は比較的滑らかでざらつきは目立っていない。風化の進行は限定的で、表面には薄い膜がかかったような印象があり、灰色～濃茶色の色調を呈している。A面右下に素材面が残存しており、これが素材剥片の打面に相当すると見込まれる。B面基準で190°～220°方向に打点を設置し、10°～40°方向に剥離軸が走っていたことが想定される。残存する素材面から判断する限り、本資料も斜軸剥片を素材としており、A面が旧背面側、B面が旧腹面側に相当する可能性が高い。器面の調整や形状には若干の差異が見られるものの、素材選択の傾向においては、これまで見てきた資料群と共通する特徴が認められる。

以上のように、いずれの資料も斜軸剥片を意図的に選択し、ときには斜状並行剥離に類する調整を施しながら器体の成形が進められている。こうした調整を通じて器体は木葉形～柳葉形に近づけられる一方で、基部には素材面が残され、平面形が略U字状を呈するなど、視覚的には異質な印象を与える。原石の形状を厳密に復元することは困難だが、想定される素材剥片の大きさからみて、湯ヶ峰を中心とする原産地近傍での石材採取が想定される。いずれの尖頭器も平坦剥離によって厚みを減じているが、その一方で側縁部には細部調整が乏しく、全体としては未完成の印象を残している。さらなる調整を通じた基部の作出を見越していた可能性は十分に予測し

ておく必要があると見込まれる。これらの尖頭器を完成品とみなすべきか、あるいは加工途中の未完成品と捉えるべきか、これによってその時間的な位置づけは少なからず変化するはずである(3)。

2-3 蛍光X線分析による石材産地の推定

以上のように、北の城遺跡の基部U字状尖頭器はいずれも下呂石を選択していると思込まれるが、このことは蛍光X線分析でも裏付けられている。以下、原産地推定の方法と結果について報告する。

蛍光X線による原産地推定は、物質にX線(励起X線)を照射したときに、その物質に固有のX線(蛍光X線)が発生する原理を用いた方法である。蛍光X線分析装置には、「波長分散型」(WDXRF)と「エネルギー分散型」(EDXRF)があり、後者のエネルギー分散型は、波長分散型に比べて分解能が低いものの、装置がコンパクトで完全な非破壊分析が可能であり、測定に要する時間が数分と短い利点がある。近年、据置型のEDXRFをよりコンパクトにして運搬可能にした可搬型蛍光X線分析装置(p-XRF)の普及がめざましい。p-XRFはEDXRFのように分析室を真空にすることができないが、検出器の能力の向上によって、従来のEDXRFとほぼ同等の分析結果が得られるようになってきている。

今回の分析に用いた装置は、明治大学黒曜石研究センターが保有するInnov-X Systems社製DELTA Premium DP-6000である(以下DELTA)。本センターでは従来からEDXRF(JSX-3100II; 日本電子社製)が稼働しており、この機器によって作成された原産地推定用の判別図をDELTAでも使用可能にするため、以下の方法を採用した。

1. JSX-3100II用の原産地判別図作成に用いた黒曜石

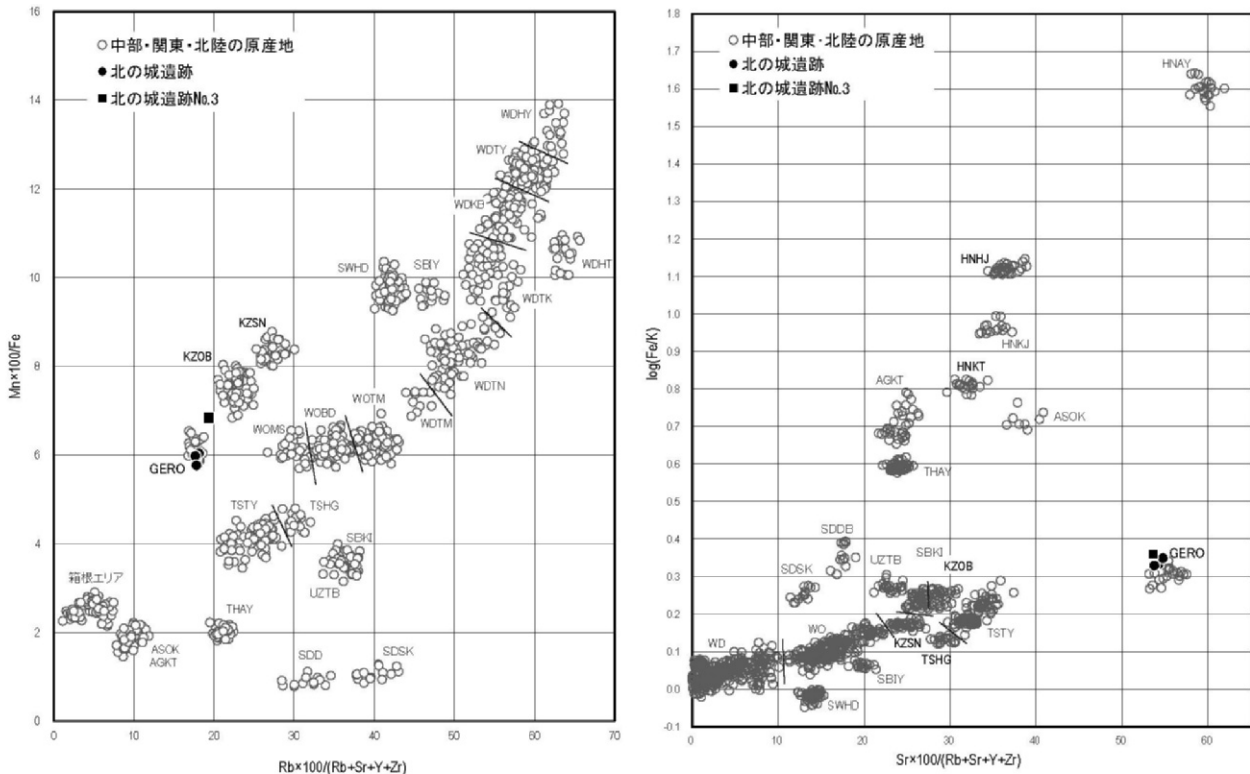


図6 中部・関東・北陸の黒曜石原産地判別図

原石のうち、17 原産地 32 試料を DELTA でも測定して、それぞれの元素強度を得る。

2. この元素強度にもとづいて判別図に用いる 4 つの指標 (① $Mn \times 100/Fe$, ② $\log (Fe/K)$, ③ Rb 分率 $=Rb / (Rb+Sr+Y+Zr) \times 100$, ④ Sr 分率 $=Sr / (Rb+Sr+Y+Zr) \times 100$ を計算する。

3. さらにここで得られた 4 つの数値を、一回帰式を用いて JSX-3100II 用の判別図で使用している 4 指標の数値の相当値に変換する。今回使用した明治大学黒曜石研究センター所有の DELTA と JSX-3100II の判別図共有の方法は、矢島ほか (2024) において詳しく説明されている。

また、今回の分析に用いた DELTA はそれぞれの元素を励起するために適した複数の分析条件を設定することができる。ここでは重元素用と軽元素用の 2 モードで分析を行った。測定条件は以下のとおりである。雰囲気：大気、照射径： $\phi 10$ mm、重元素分析管電圧：40 kV、重元素分析時間：30 秒、軽元素分析管電圧：10 kV、軽元素分析時間：60 秒。

なお、Mn および Fe 強度は、重元素分析モードと軽

元素分析モードのどちらの分析でも算出できるが、より蛍光 X 線強度の値が大きくなる軽元素分析モードの値を採用した。

指標①・②と指標③・④をそれぞれ X 軸と Y 軸とした 2 つの判別図上において、原産地黒曜石の散布域と、プロットされた遺跡出土黒曜石の位置を照合することによって産地を決定する。

分析の結果、以下の原産地推定結果が得られた (図 6, 表 2, 表 3)。資料 No.1, 2, 4 が湯ヶ峰産下呂石と判別され、資料 No.3 は判別不可であった。なお、資料 No.3 は、判別図上では $Mn \times 100/Fe$ 値が上方にズレて「判別不可」となったが (図 6: 「北の城遺跡 No.3」 [■]), Sr 分率 $=Sr / (Rb+Sr+Y+Zr)$ は散布域内に収まっている。資料 No.3 は、外観・質感も他の 3 点と同様に下呂石そのものであり、判別図上は不可としたものの、下呂石の可能性が高い資料と考えられる。

以上の分析結果は肉眼観察の所見と矛盾しておらず、こうした下呂石の排他的な選択が当該資料群の存在をいっそう際立たせている。

表2 原産地分析結果一覧表

遺跡 No	器種	分析番号	推定産地	Rb%	Mn/Fe	Sr%	log Fe/K
北の城1	尖頭器	17	GERO	18.08	6.04	54.21	0.33
北の城2	尖頭器	18	GERO	17.65	5.98	53.70	0.33
北の城3	尖頭器	19	GERO ?	19.34	6.84	53.61	0.36
北の城4	尖頭器	20	GERO	17.80	5.77	54.70	0.35

3. 北の城遺跡の尖頭器とその時間的位置づけ

北の城遺跡の尖頭器について、それらの時間的位置づけを厳密に絞り込んでゆくには、いくつかの障壁が存在する。両面調整を基本に尖端部を作出しつつ、素材面を基部側に残して略U字状を呈する資料は、管見の限りでは類例が極めて乏しい。また、4点の資料が小範囲にまとまって出土した一方で、石器群としての出土状況が十分に記録されておらず、その点が時期決定をさらに困難にしている。その一方で、それらの尖頭器が空間的に近接し、なおかつ天竜川流域に位置しながら下呂石を例外的に選択する点では、同一セットとして扱うことに大きな支障はない。すでに述べたように素材選択や加工技術に斉一性が認められる点は、それらが一体の資料群を構成していた可能性を示唆している。時期決定に難点があることは認めつつ、以下ではこれらの尖頭器を一連の石器群の構成要素として取り扱う方針を明確にしておきたい。

これらの尖頭器が両面調整を基本に生産され、いずれも最大長が100mmを上回る点に注目すれば、縄文時代草創期の尖頭器石器群として評価することも不可能ではない。一般に、こうした長大な尖頭器は隆起線文土器群に先行して発達する傾向が知られている。素材面を基部側に残置し、その平面形が略U字状を呈する点、あるいは斜状並行剥離に類似する調整を除けば、たしかに尖頭器石器群との類似性を認めることは可能である。実際に、同じく天竜川流域に立地する神子柴遺跡では、一部の尖頭器に下呂石が使用されている点が以前より注目されてきた。こうした石材選択の点においても、神子柴遺跡との同時期性を考慮すること自体は決して不当ではない。これら一部の属性を重視する限りでは、隆起線文土器群に先行する尖頭器石器群の変異形として認識する考

表3 原産地分析結果集計表

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田 (WD)	フヨウライト	WDHY	0	0.0
	鷹山	WDTY	0	0.0
	小深沢	WDKB	0	0.0
	土屋橋北	WDTK	0	0.0
	土屋橋西	WDTN	0	0.0
	土屋橋南	WDTM	0	0.0
和田 (WO)	古峠	WDHT	0	0.0
	高松沢	WOTM	0	0.0
	ブドウ沢	WOBD	0	0.0
諏訪	牧ヶ沢	WOMS	0	0.0
	星ヶ台	SWHD	0	0.0
蓼科	冷山	TSTY	0	0.0
	双子山	TSHG	0	0.0
浅間	大窪沢	ASOK	0	0.0
新発田	板山	SBIY	0	0.0
	上石川	SBKI	0	0.0
佐渡	真光寺	SDSK	0	0.0
	堂林	SDDB	0	0.0
魚津	坪野笠取山	UZTB	0	0.0
天城	柏峠	AGKT	0	0.0
箱根	畑宿	HNHJ	0	0.0
	鍛冶屋	HNKJ	0	0.0
	黒岩橋	HNKI	0	0.0
	上多賀	HNKT	0	0.0
	芦ノ湯	HNAY	0	0.0
神津島	恩馳島	KZOB	0	0.0
	砂糠崎	KZSN	0	0.0
	砂糠崎X	KZSX	0	0.0
高原山	甘湯沢	THAY	0	0.0
下呂石	GERO	3	100.0	
合計			3	100.0
不可			1	
非黒曜石			0	
総計			4	

え方は、ただちに否定されるものではない。

その一方で、これらの尖頭器の帰属時期を繰り下げて、隆起線文土器群ないしそれ以降の段階に帰属させる見解も、同様に成立し得る点を確認しておきたい。とりわけ資料 No.4 に関しては、斜状並行剥離に類似する規則的な調整で成形されている点が、無視できない特徴となっている。本資料では、平坦剥離の打点位置を表裏両面で近接させるなど、直接打撃とは異なる手法によって規則的な剥離が進められている。この特徴的な剥離技法は、隆起線文土器群に先行する尖頭器石器群には見られず、

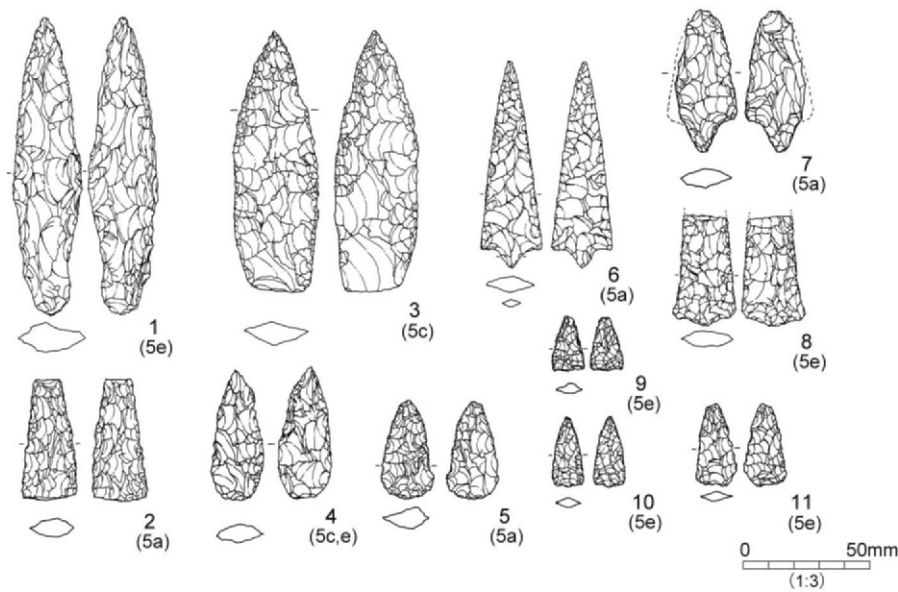


図7 桐山和田遺跡の尖頭器類 (松田編 2002)

西日本の柳又型有舌尖頭器や同時代の尖頭器に特徴的な手法である。器体右側縁を中心に並行剥離が発達し、横断面の最厚部が中軸線より左に偏る点も含めて、これらの石器との共通性を見出すことができる。如上の属性に注目する限りでは、北の城遺跡の尖頭器を隆起線文土器群の段階以降に帰属させることも十分に可能である。

以上のように、本遺跡出土の尖頭器を隆起線文土器群の段階以降に帰属させ、とくに西日本に特徴的な柳又型有舌尖頭器と関連付ける方向性も模索しなくてはならない。たしかに、基部が突出せず略U字状を帯びる属性のみを取り上げれば、それ以降の段階に帰属する可能性も完全には否定できない。とくに西日本では、縄文時代早期前葉に至っても両面調整の尖頭器が発達することが知られている(田部 2011)。ただし、これらの尖頭器はしばしば柳葉形を呈し、また器体調整が粗雑であることから、直ちに北の城遺跡の資料と同一視することは現実的ではない。ましてや、北の城遺跡に見られる斜状並行剥離に類似する器体調整を考慮すれば、同じ土俵の上で論ずることは適切ではない。ともあれ、このように特徴的な調整技術は時間幅が限定されており、少なくとも隆起線文土器群の段階以降に位置付けるのが妥当と考えられる。

管見の限りでは、北の城遺跡の尖頭器に類似する資料は極めて乏しいが、それでも桐山和田遺跡に類例が確認

されている点はとくに注目される(松田編 2002)。本遺跡は奈良県北東部の大和高原に位置しており、木津川の支流にあたる布目川左岸の河岸段丘上に立地している。布目ダム建設事業に伴う水没予定地の事前調査として、1988～1990年に橿原考古学研究所によって調査され、縄文時代草創期～早期の良好な資料群が出土した。とりわけ、西日本では希少な草創期の資料群がまとまって出土したことから、この地域を代表する遺跡として位置づけられている。近隣に位置する北野ウチカタピロ遺跡と並んで、当時の狩猟採集民がこの地に生活拠点を形成していたことが窺い知れる。こうしたなかで桐山和田遺跡の資料群に北の城遺跡に類する尖頭器が含まれることは、その時間的位置づけを考察するうえで重要な手掛かりとなる(図7)。

桐山和田遺跡では東西、南北それぞれ120mを超える範囲が発掘され、幾つかの地点で草創期の資料群がまとまって出土している。本遺跡における縄文時代の堆積層は5a～5e層に細別されており、早期の遺構は主に5a層や5c層で、草創期の遺構は主に5e層で確認されている。このうち草創期の遺構は遺跡の南西側にもっとも集中して検出されたほか、北側の調査区にも点在することが報告されている。あいにく遺物集中部を除けば出土資料の位置情報は限られているが、隆起線文土器および無文土器に伴って、まとまった石器群が出土している。後

述する一括性の問題はあるが、とくに遺跡南西側の遺物集中部を中心に、槍先形尖頭器、有舌尖頭器、石鏃を中心とする石器群が確認されている。調査から40年近くが経過した今日においても、この時期の西日本を理解するうえで、なお中核的な資料群と評価されている。

そして、これらの資料群のなかに北の城遺跡に類似するサヌカイト製尖頭器が含まれる点は、その時期認定において無視できない重要な事実である(図7:3)。この尖頭器は両面調整によっておおむね木葉形に仕上げられているが、基部が略U字状を呈する点に最大の特徴がある。偶発的な折損の可能性も考慮しつつ資料を実見したところ、先端部付近に若干の新鮮な剥離面が残る以外は、ほぼ完形と判断することができた。この尖頭器は平坦剥離を通じて全体的に厚みを減じているが、基部には表裏両面に素材面と思しき剥離面が残されており、一般的な槍先形尖頭器とは異なる独自の特徴を示している。最大長102mm、最大幅33mm、最大厚9mmと北の城遺跡の資料に比べて一回り小さいとはいえ、技術面・形態面で高い類似性が認められる。桐山和田遺跡と北の城遺跡の尖頭器を対比することに大きな問題はないと考えられる。

興味深いことに、これは表面的な属性に留まることなく、斜軸剥片を素材として選択する点でも高い類似性が認められる。たしかに両面調整の素材推定には現実的な限界があるが、基部付近に残された素材面に基づいて、ある程度の判断は可能である。こうした観点に立つとき、A面・B面の基部付近はそれぞれ素材の主剥離面と先行剥離面に相当する可能性が高く、剥片素材であったことが窺い知れる。素材面の剥離軸に着目すると、旧主剥離面(A面)の打点はA面基準で40°~70°方向に存在したことが推定され、剥離軸はおよそ220°~250°方向に走っていたと想定される。報告書上の実測図では逆方向の剥離が予測されているが、筆者自身の観察結果に基づけば、上記の判断が妥当と結論付けられる。このように素材選択の観点からも、北の城遺跡と桐山和田遺跡の基部U字状尖頭器には技術的共通性を読み取ることが可能である。

ここで問題となるのが、桐山和田遺跡の石器群をめぐって、その時間的な位置づけに研究者間で認識の差が

ある点である。本遺跡では隆起線文土器とともに無文土器が出土しており、両者を時間的に分離するのか、それとも一体の資料群と見なすのか、が問われることになる。この判断は、必然的にそれらの土器群にともなう石器群にいかなる時間的位置づけを与えるのか、という問題に直結する。このうち無文土器は上黒岩岩陰遺跡(6層)で隆起線文土器の上層から確認され、爪形文土器や押圧縄文土器と並行するという見解が提示されている(藤山2020)。なかには無文土器の単独段階を設定する見解もあるが(矢野2013)、近年の調査事例を踏まえる限り、そうした議論には学術的な必然性が乏しい。いずれの立場を取るにせよ、しばしば隆起線文土器と時間差が予測されるなかで、土器群および石器群の一体性が問われるのである。

現在、桐山和田遺跡の資料群をめぐっては、その時間的な評価をめぐって議論が二分しており、なかには一体の資料群として評価する見解も見られる。尖頭器、有舌尖頭器、石鏃等を一括して、隆起線文土器群の段階、とくにその後半に位置付ける見解は、その代表例である(松田1998)。これは、ことさら隆起線文土器と無文土器を時間的に区別することなく、本遺跡から出土した石器群を一括して取り扱う立場に他ならない。たしかに報告書記載の情報に基づく限りでは、それらを積極的に分離するだけの客観的根拠が乏しいことも事実である。このような状況下において、本遺跡の石器群を一体の資料群として取り扱う立場にも一定の合理性を認めなくてはならない。出土状況の微細な記録が乏しい以上、それらを積極的に分離してゆく議論に決定打が欠けている点は、たしかに認める必要がある。

その一方で、近年では石器群の内容を精査することで、桐山和田遺跡の出土資料に一定の時間幅を想定し、積極的な分離を試みる研究者も少なくない。隆起線文土器と無文土器を時期差と捉えると同時に、それらが地点を違えて分布する点に注目し、付随する石器群にも時期差を認める見解である(田部2013)。それぞれの地点において、石鏃を含めた器種構成が異なっている点を強調し、時間的な前後関係を予測するわけである。こうした変遷観の是非はともかく、石器の形態や構成に地点差を認識し、そこに時期差を見出す方向性はその後とも追認されて

いる（上峯 2018）。たしかに他遺跡の出土資料と照らし合わせると、桐山和田遺跡の出土資料を一括して取り扱う点には無理があるようにも思われる。誰もが共通した理解に到達することは難しいにせよ、ある種のパリンプレストとして理解してゆく必要がある。

こうした認識の齟齬はあるものの、桐山和田遺跡の資料群をめぐって、大枠では隆起線文土器群の段階以降に位置付ける点では見解が一致している。たしかに、本遺跡の基部 U 字状尖頭器をめぐって、草創期と早期のいずれに帰属させるべきか、完全には切り分けがたい点を確認しておく必要がある。草創期の資料は 5e 層を中心に出土するが、当該資料は 5c 層から出土しており、層的には早期の所産である可能性も否定しきれない。とはいえ、早期の尖頭器がしばしば柳葉形を呈し、また粗雑な調整で成形される点はすでに述べた通りであるため、当該資料をそれらと同一視することは困難である。草創期に固有の有舌尖頭器や有溝砥石が 5a 層から 5c 層にも及んでいる点は、下層からの混入を示唆している。これらの点を加味すれば、桐山和田遺跡の基部 U 字状尖頭器を草創期の枠内で評価することは、おおむね穏当な判断と言える。

以上の評価を踏まえれば、北の城遺跡の基部 U 字状尖頭器を隆起線文土器群の段階以降に帰属させることに大きな支障はない。とりわけ注目すべきは、合計 4 点の尖頭器の一部に、斜状並行剥離に類似する規則的な器面調整が認められる点である（2-2）。もちろん厳密に見ればそれらを斜状並行剥離と断定することは困難であるが、間接打撃ないし押圧剥離を駆使して規則的な整形を進めていたことは確かである。あらためて述べるまでもなく、こうした調整手法は柳又型有舌尖頭器や同時代の尖頭器生産と強く結びついたものである。本遺跡の尖頭器が、その立地にもかかわらず例外なく下呂石を使用している点も、こうした西日本に特有の石器群との関係性を示唆している。こうした技術的特徴に着目する限りでは、それらを柳又型有舌尖頭器と関連付けて理解することは決して不当な判断ではないように思われる。

かくして有舌尖頭器との関連性に着目するとき、北の城遺跡の基部 U 字状尖頭器は、隆起線文土器群の段階に限定して理解される可能性が高い。一般に、東日本の

有舌尖頭器は、この段階に限定的にとまなう器種と認識されている。本地域では、隆起線文土器群に後続する段階を迎えて、有舌尖頭器が姿を消して、石鏃を中心とする石器群に推移してゆく過程を明瞭に捉えることが可能である。その一方で、西日本の有舌尖頭器は隆起線文土器群の段階に限定されることなく、それに後続する段階（光石 2008 など）、さらには早期まで存続した可能性も想定されてきた（西口 1991 など）。東日本では隆起線文土器の段階に留まるのに対して、西日本ではより広い時期にわたって継続的に使用された、という考え方である。ただし、近年の調査成果を踏まえると、それが隆起線文土器群の段階以降も存続したとする明確な証拠はほとんど存在しない。

ここ最近の一括資料の蓄積を通じて、隆起線文土器群に後続する段階を迎え、有舌尖頭器が姿を消したことは明確に裏付けられている。たとえば粥見井尻遺跡では、無文土器群をとまなう 4 基の竪穴住居が確認されているが、いずれも石鏃を中心とする石器群が出土している（中川編 1997）。また相谷熊原遺跡でも、無文土器群をとまなう 5 基の竪穴住居が確認されているが、やはり有舌尖頭器は確認されていない（松室編 2014）。これらの事例を踏まえると、有舌尖頭器は無文土器群の時期まで存続することなく、それ以前に姿を消した可能性が高く、ましてや早期まで存続したとは考えられない。神並遺跡における有舌尖頭器の風化度分析は、複数の時期の石器群の混在を示唆しており、こうした考え方を裏打ちしている（上峯 2011）。有舌尖頭器は隆起線文土器群の段階に限定され、斜状並行剥離の存在自体が時間的な指標となりうる点を強調しておきたい。

あらためて北の城遺跡の基部 U 字状尖頭器に議論を戻すと、それらは隆起線文土器群の段階に位置付けられる可能性が高い。たしかに最大長が 100mm を大きく上回る両面調整尖頭器は、一見する限りでは神子柴遺跡のそれと類似しているようにも映る。それだけに、隆起線文土器群に先行する段階に位置付ける見解にも一定の理解を示しうる部分がある。しかしながら、一部の資料に見られる斜状並行剥離に類する規則的な調整は、それが有舌尖頭器の生産と関連することを強く物語っている。その横断面の特徴的な形状も含めて、これらの技術的特

徴は隆起線文土器群に先行する段階には認められず、むしろ隆起線文土器群の段階に特徴的な技術と評価したほうが良い。さらに踏み込んで考えるならば、それらを隆起線文土器群の段階に繰り下げて、有舌尖頭器の未成品として評価してゆく必要すら生じるわけである(4-1)。

4. 北の城遺跡の尖頭器とその含意

4-1 未成品としての尖頭器

ここまで概観してきたように、北の城遺跡から出土した4点の尖頭器は一見完成品に見えるが、実際には柳又型有舌尖頭器の未成品であった可能性が高い。これらの尖頭器は両面調整を通じて厚みを減じているが、完全な除去には至っておらず、また先端部を除けば細部調整は不十分で側縁の形状も整えられていない。一部の資料には有舌尖頭器に特徴的な斜状並行剥離に類似する調整が確認されることから、未成品と評価することに大きな支障はない。言葉を換えれば、それらはさらなる調整を通じて有舌尖頭器へと仕上げられてゆく前段階に位置付けられることを示唆している。最終的には基部に調整を加えて舌部を作出し、それによって着柄部を完成させるなど、一連の製作工程の途上にある資料と理解される。本遺跡の尖頭器が下呂石を選択的に使用している点も含めて、西日本の柳又型有舌尖頭器と関連している可能性は十分に予測される。

もちろん、一見したところでは有舌尖頭器とは法量に大きな差異が見られるため、こうした想定に否定的な見解もあるだろう。たしかに、柳又型有舌尖頭器の大半は最大長80mm未満に収まっており、最大長が100mmを大きく超える尖頭器とは相容れないように見える。また、有舌尖頭器の最大幅がおおむね30mm未満に収まるのに対して、北の城遺跡の尖頭器は最大幅が40mmに達している点と形態的齟齬が認められる。とはいえ、柳又型有舌尖頭器は形態的バリエーションが大きく、なかには最大長120mm前後、最大幅30mm前後におよぶ大型資料も散見される点に注意が必要である。香川県の前田東・中村遺跡(宮崎編2006)や大池遺跡(浜田1994)

の出土例は、そうした大形有舌尖頭器の代表例と位置付けることができる。以上を踏まえると、北の城遺跡の大形尖頭器も細部調整を経ることで有舌尖頭器に仕上げられる余地は充分にあったと考えられる。

こうしたなかで、上黒岩岩陰遺跡の有舌尖頭器とその製作工程の復元は、基部U字状尖頭器の理解において極めて示唆的である。本遺跡は愛媛県中央部に位置しており、1961～1970年の調査を通じて、福井洞穴と並ぶ注目遺跡として広く認識されるに至った。かつては部分的な資料報告に留まっていたが、近年の再整理作業を通じて基本情報が共有されるようになった点には大きな意味がある(春成・小林編2009)。こうした再整理作業の一環として、未成品を含めた有舌尖頭器の製作工程が詳細に復元されるに至っている(綿貫2009)。その細部には再考の余地があるが、柳又型有舌尖頭器の良好な一括資料に限られるなかで、残渣類の豊富な出土を活かした議論として大いに注目に値する。素材生産から完成品に至る一連の工程を復元した事例として、西日本における数少ない成果の一つと位置付けることができる。

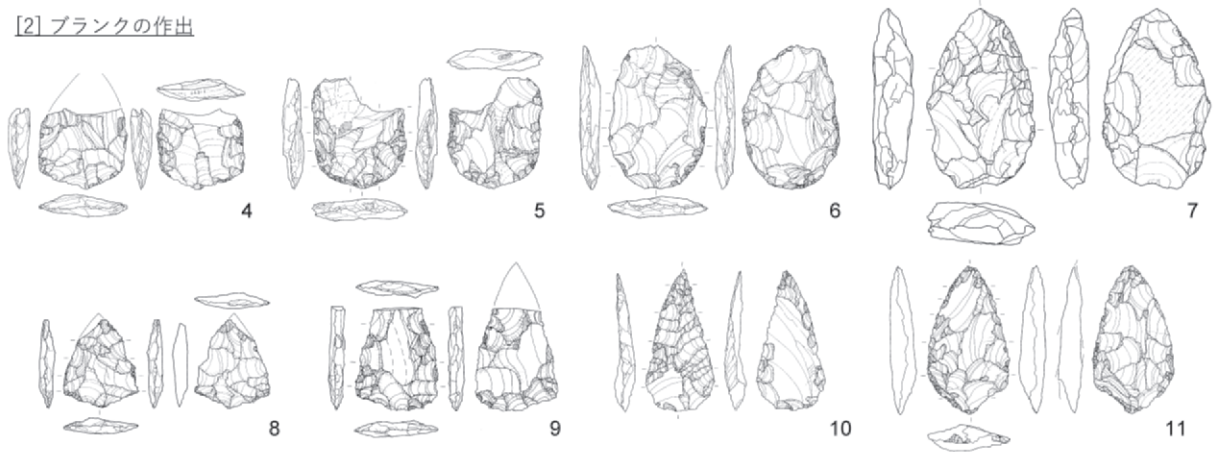
こうした成果を踏まえたくえて、実際の資料と照合すると、有舌尖頭器の製作工程は便宜的に「①珪質堆積岩類」と「②安山岩・粗面岩類」に大別して理解できる(図8,図9)。このうち「①珪質堆積岩類」は報告書中で「赤色珪質岩」された石材を中心に、「チャート」や「珪質頁岩」とされた石材を包括している。また「②安山岩・粗面岩類」は、同じく報告書中で「無斑晶質安山岩」された石材を中心に、一部に「輝石安山岩」や「石英粗面岩」とされた火山岩を含んでいる。ところで、報告書の考察では前者は有舌尖頭器、後者は「石筥」の生産と関連付けられているが、その必然性は乏しい。筆者の観察に基づけば、両者ともに有舌尖頭器の生産と関連付けて理解するのがもっとも妥当である。それぞれの資料群はいずれもU字状端部を有する両面調整体の作出に重点を置いており、それをブランクとして有舌尖頭器に仕上げたことが想定される。

はじめに「①珪質堆積岩類」の資料群に注目すると、それらは有舌尖頭器の製作工程を鮮明に留めていることが容易に理解できる(図8)。後述する「②安山岩・粗面岩類」と同じく礫素材の資料を含むと考えられるが

[1] 両面調整による成形開始



[2] ブランクの作出



[3] 有舌尖頭器の完成

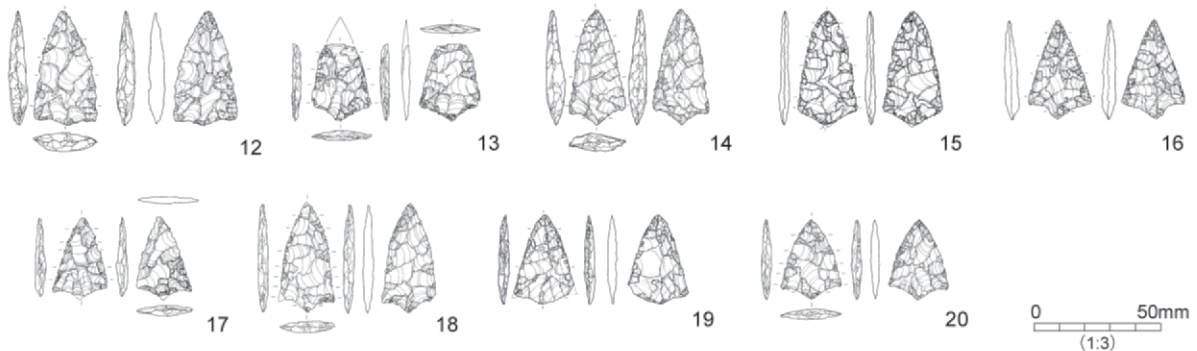
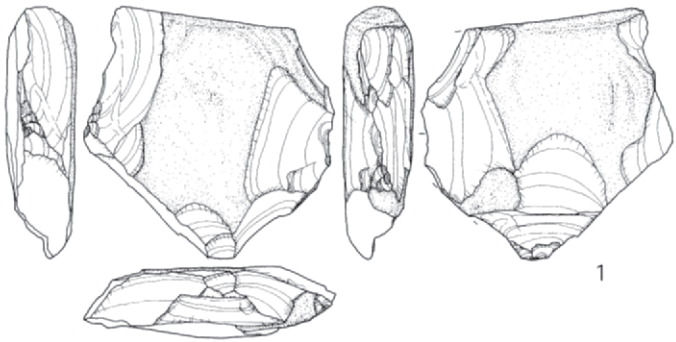


図8 上黒岩岩陰遺跡における有舌尖頭器の生産 (①珪質堆積岩類) (春成・小林編 2009)

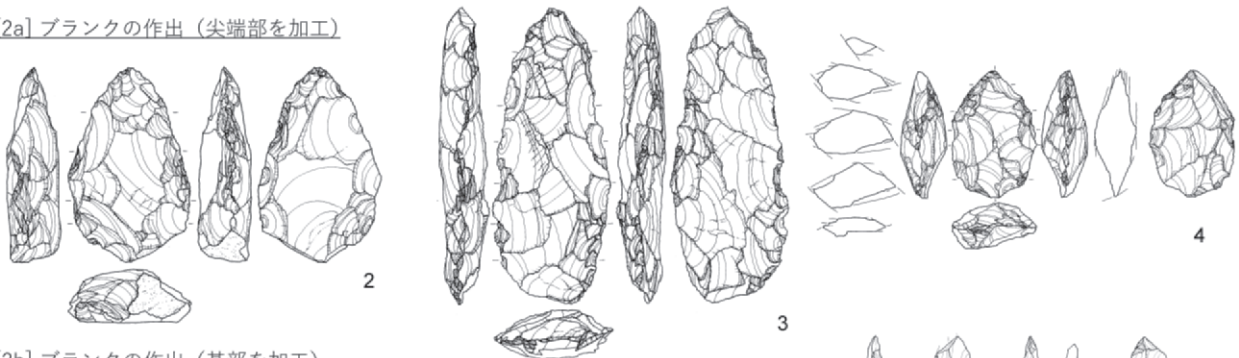
([1]), 主たる素材は小形で薄手の剥片であったと推定される。これらの剥片類は完成品と極端なサイズ差はなかったと想定されるが、とくに薄手の横長剥片が目立っている。こうした小形剥片を主たる素材に両面調整を施し、一端に尖端部を作出しつつ、対向する一端をU字状に加工してゆくことで特徴的な両面調整体が作出されてゆく([2])。そのうえで、U字状の末端に細部加工を加え、そこに舌部を作出することで最終的な有舌尖頭器が完成することになる([3])。この最終工程では斜状並行剥離が器面調整にしばしば駆使され、それによって小形で薄手の有舌尖頭器が完成に至るわけである。

続いて「②安山岩・粗面岩類」の資料群に注目すると、大局的には「①珪質堆積岩類」と同様の工程を通じて有舌尖頭器が生産されていたことが読み取れる(図9)。それらは小形・薄手の剥片を素材とする場合もあるが、しばしば礫ないし厚手の剥片を選択していた模様である([1])。本遺跡では安山岩の板状礫の末端を交互に打ち欠いた「石核」が幾つか確認されており、これが有舌尖頭器の素材であった可能性が高い。こうした大形素材に両面調整を加えて厚みを減ずる過程で、その一端に尖端部、それに対向する端部にU字状の基部が作出されることになる([2])。これら涙滴形の資料は「石筥」と分

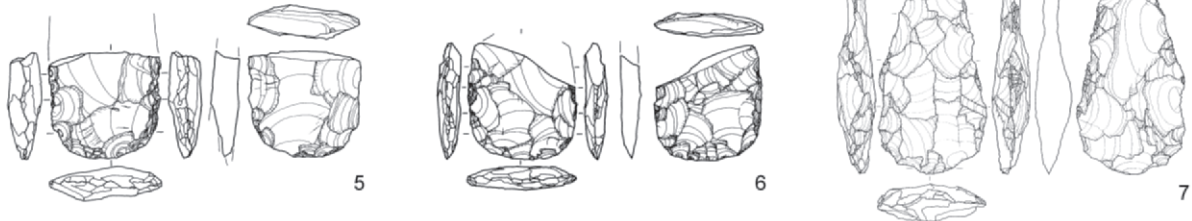
[1] 両面調整による成形開始



[2a] ブランクの作出 (先端部を加工)



[2b] ブランクの作出 (基部を加工)



[3] 有舌尖頭器の完成

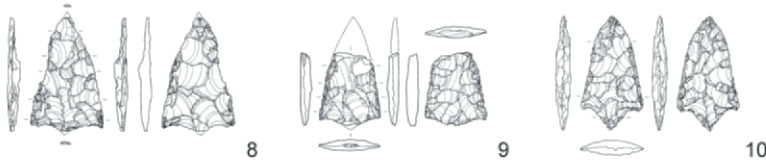


図9 上黒岩岩陰遺跡における有舌尖頭器の生産 (②安山岩・粗面岩類) (春成・小林編 2009)

類されているが、実際には有舌尖頭器の未成品であった可能性が高い。ここでもU字状に成形された末端を舌部へと整形し、さらには器体全体に細部調整を加えることで有舌尖頭器が仕上げられるのである ([3])。

こうした「②安山岩・粗面岩類」の資料群はとくに豊富に残されており、製作工程の細部に至るまで正確に読み取ることが可能である (図9)。とりわけ注目されるのは、両面調整を通じて素材を成形する過程で、まずもって先端部が作出される点である ([2a])。器体調整が粗雑な剥離を中心に進められるなかで、先端部には細部加工が集中しており、この部位の加工に注力していたこと

が理解される。このようにして先端部の整形がまずもって進められるが、器体にはなお大きな厚みが残されており、これを減じつつU字状の基部が作出されてゆく ([2b])。この工程を通じて器体の厚みは段階的に除去され、北の城遺跡に類する基部U字状のブランクがその姿を鮮明にしてゆくのである。最終的には、こうして作出されたブランクをもとに、舌部の作出を含めた器体成形が進められることで、相対的に小形の有舌尖頭器が完成することになる。

なお、「②安山岩・粗面岩類」の資料群では、器体成形の過程が読み取りやすい一方で、完成した有舌尖頭器

が豊富とは言い難い。たしかに、端部U字状の両面調整体を「石鏡」と認定し、有舌尖頭器の生産と一対一には結び付けない立場もあるはずである。すなわち、基本的には「石鏡」生産の技術体系が分離されており、その技術を流用するかたちで有舌尖頭器が生産されたという理解である(綿貫 2009, p.444)。とはいえ、これらの一連の資料群の延長上に舌尖頭器の生産が位置付けられることは数多くの未成品が鮮明に物語っており、上記の理解を大きく変更する必要はない。むしろ、製作途上の資料が豊富に残されている一方で、完成品がごく一部しか遺跡内に残されていない点に焦点を合わせるべきと考える。この点は、有舌尖頭器の生産とその空間的な展開(4-2)と関連する可能性があるため、ここで注意を喚起しておきたい。

かくして、基部U字状の尖頭器は相対的に器体調整が粗く、細部調整も欠いているため、それ自体を独立した完成品と見なすことは困難である。同じく四国に位置する不動ヶ岩屋洞穴でも、いわゆる杏仁形尖頭器が完成品ではなく、有舌尖頭器の未成品として理解されるに至っている(氏家 2008)。また次節で述べる開田高原の幾つかの遺跡でも、やはり基部U字状の両面調整体を介して柳又型有舌尖頭器の生産が進められていたことが確認される。これらの事例に照らすならば、北の城遺跡の4点の尖頭器を同様に柳又型有舌尖頭器の未成品と理解することに特段の支障はない。これまで繰り返してきたように、これらの尖頭器では器体の厚みが十分に除去されておらず、側縁形状も完全には整えられていない。見方を変えれば、追って細部調整を加えることで最終的な形状を整え、基部を作出する工程を見越していたと考えられる。

以上のように、これまで製作工程が不鮮明であった柳又型有舌尖頭器の製作工程について、これらの資料群はその一断面を記録している可能性が高い。桐山和田遺跡を含めて、あらかじめ基部U字状に成形されたブランクの厚みを減じ、最終段階で基部を加工して舌部を作出する工程が想定される。たしかに細部には差異が見られるものの、上述した複数の遺跡において、おおむね共通した技術的理解が成立すると考えられる。あらためて北の城遺跡の尖頭器に議論を戻すと、それらの類例が乏し

いのは、それ自体の希少性に起因するわけではなさそうである。むしろ、さらなる細部加工を経て有舌尖頭器に仕上げられた結果、中間工程の資料が遺跡に残されにくかったと理解するのが妥当である。検討事例の蓄積は今後の課題であるが、この点は次節で述べる石器製作の遺跡間連鎖の問題とも間接的に関連する可能性がある。

4-2 有舌尖頭器の生産と供給

このように基部U字状尖頭器を柳又型有舌尖頭器の未成品と評価したうえで、北の城遺跡に下呂石製の尖頭器が残されるに至った経緯を展望することにしたい。一般に、下呂石は湯ヶ峰に産出し、飛騨川の水流によって下流まで転礫として運搬されることが報告されている(斎藤 1993 など)。とくに縄文時代を迎えて頻繁に利用されるようになり、下呂石製の石器が濃尾平野や富山平野の遺跡でもしばしば出土することが知られている(山本 1992 など)。その一方で、黒曜石のような広域流通は限られており、下呂石が飛騨山脈や木曾山脈を越えてその東側に広がる機会は限定的であったと考えられている。こうした一般的な分布傾向が見られるが故に、その分布圏外に位置する北の城遺跡でまとまって出土した文脈が問われるわけである。ここでは有舌尖頭器の生産と供給という観点から、その背景に取り組むことにしたい。

結論を先に述べれば、北の城遺跡の居住者は、将来的な有舌尖頭器の製作を見越したうえで、ブランクを運搬していた可能性が高い。すでに確認したように、彼らは大形の角礫を利用して規格的な斜軸剥片を生産していたことが窺い知れる。必然的に、彼らは飛騨川や木曾川の河床で原石を採取したのではなく、むしろ原産地でまとめて角礫を採取し、ブランクの状態まで加工していたと推測される。本遺跡と湯ヶ峰のあいだには、急峻な飛騨山脈や木曾山脈を介して、直線距離で60kmを上回る距離がある。実際には、これらの山間部を縫うようにして、100km以上の距離を超えて、ブランクの状態まで仕上げられた尖頭器が運搬されてきた可能性が高い。後述する幾つかの遺跡は、このような遠隔地の石材を製作途上の状態で運搬し、さらには在地石材を併用した石器製作を展開していたことを物語っている。

こうした現象を理解するうえで、ここでは開田高原に

位置する小馬背遺跡を手掛かりとして、若干の展望を示すことにしたい（小林編 1988, 1989）。この高原は御嶽山の北麓に位置し、マクロに見れば木曾川と飛騨川にはさまれた標高 1000～1500m の山岳地帯に平坦な土地が広がっている。まさしく下呂石の原産地と現在の北信・南信地域を結ぶ結節点に他ならず、この高原で下呂石がしばしば使用されているのは実に自然である。開田高原には、小馬背遺跡のほかに西又遺跡や柳又遺跡が立地しており、いずれも柳又型有舌尖頭器を中心とした石器群が出土している。これらの特徴的な石器群が出土している点は、あらためて本地域が西日本と東日本を結ぶ結節点としての役割を果たしていたことを示している。本地域の有舌尖頭器にしばしば下呂石が使用されている点は、それらの供給を理解するための大きな手掛かりである。

このうち小馬背遺跡は、國學院大學によって 1987～1988 年に調査され、上黒岩陰遺跡と同様に有舌尖頭器の製作工程をよく物語っている（図 10）。本遺跡の石器群にはチャート製の両面調整体がいくつか含まれているが、大半は有舌尖頭器の未成品と位置付けられる（同図：1-4）。いずれも粗雑な加工で先端部を作出しているが、依然として器体の厚みを除去しきれておらず、途中で放棄された資料と判断される。これらの資料は先端部と対向する端部を略 U 字状に加工しており、結果的に全体的な輪郭が涙滴形を呈する点に特徴がある。類似した資料は西又遺跡などでも確認されており、平坦剥離を通じてそれらの厚みをさらに減ずることで有舌尖頭器に仕上げていたことが理解される。基部 U 字状尖頭器を介して有舌尖頭器の生産を進めていた点は、西日本の遺跡と相似した現象とみなして差し支えない。

ここで興味深いのは、基部 U 字状尖頭器を介した有舌尖頭器の生産が、チャートを中心に確認される点である。当該石材に着目すると、両面調整を通じた粗割の段階から、平坦剥離による器厚の除去を経て、最終的に有舌尖頭器へ仕上げてゆく工程をおおむね示している（図 10：1-5, 7-10）。それらに関連すると思しき剥片類も少なからず出土しており、一連の製作工程がこの地で進められていたことを裏付けている。そもそも開田高原では、御嶽山の土台ともいえる中生代ジュラ紀付加体由来す

る層状チャートが露出していることが知られている。あいにく筆者は露頭の観察に至っておらず、したがって遺跡出土資料との直接的な対比も実施できていない点を断っておく必要がある。厳密な産地の特定は今後の課題であるが、地元の石材資源を利用して石器生産が進められていた点は自然な成り行きと言える。

これに対して、有舌尖頭器には下呂石製（「玻璃質安山岩」製）が含まれるものの、生産痕跡は極めて限定的である（図 10：6, 11-12）。西又遺跡や柳又遺跡を含めた開田高原の遺跡群では、その地理的条件を反映して、しばしば下呂石の存在を確認することができる。柳又型有舌尖頭器が西日本を中心に分布するなかで、それらの分布の周縁部において、こうした石材が広がるのである。とはいえ、これらの有舌尖頭器はいずれも厚みを減じた状態で残されており、粗大な両面調整体は報告されていない。この地域で器体成形を含めた一連の製作工程が遂行されていたとは考えにくく、この点ではチャートを使用した石器生産とは明確なコントラストを示している。ここから考える限りでは、下呂石製の石器は未成品ないし完成品の状態で搬入され、それとは別に在地石材を使用した石器製作を展開していたことが理解される。

これに類する状況は、柳又型有舌尖頭器を含む石器群にしばしば見られるため、上述した開田高原の事例は決して例外的な出来事ではなかったと考えられる。たとえば、兵庫県の国領遺跡では、サヌカイト製の有舌尖頭器とチャート製の「尖頭器」が見られるが、後者は有舌尖頭器の未成品であった可能性が高い。不動ヶ岩屋洞穴のケースと同じく、粗雑な調整の「尖頭器」が製作途上と評価されるわけである（氏家 2008）。国領遺跡では、サヌカイト製石器には生産痕跡が乏しい一方で、チャート製の石器には未成品を含めた残渣類が豊富である（村上・久保編 1991）。ここでも前者を搬入したうえで、在地石材を使用した有舌尖頭器の生産が繰り返されていた可能性が高い。石器群の内容を完全に同一視することはできないにせよ、相似した関係が散見される点は、未成品や完成品による運搬が常態化していた可能性を示唆している。

あいにく、下呂石製の有舌尖頭器の初期工程がどこで進められていたのか、明確に議論するための情報は極め

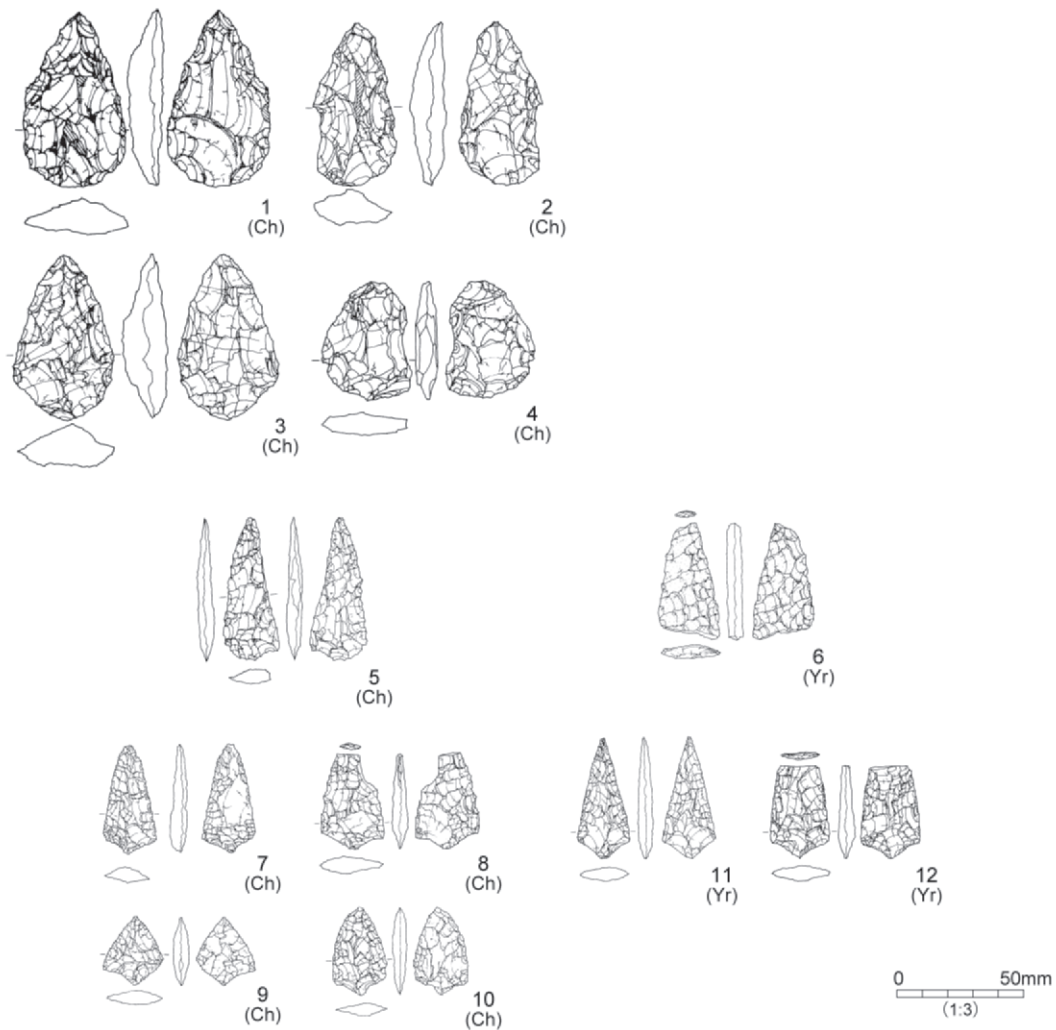


図 10 小馬背遺跡における有舌尖頭器の生産 (Ch: チャート, Yr: 下呂石) (小林編 1989)

て限られている。北の城遺跡の事例をどこまで一般化できるか不明であるが、少なくとも一部は下呂石の原産地直下で進められていたと考えられる (2.2)。将来的には湯ヶ峰周辺で上黒岩陰遺跡に類する生産痕跡が確認される可能性は充分にある。とはいえ、両面調整体の成形が原産地直下に集約されていたとしても、隆起線土器群の段階に先立つ尖頭器石器群とは直ちに峻別できない恐れがある。大林遺跡 K 地点、湯ヶ峰山頂遺跡といった既存の資料群に関しても、あらゆる可能性を想定したうえで、時間的位置づけを調べてゆく必要がある。いずれにしても、遠隔地の原産地を取り込んだ石器生産が進められているとすれば、西日本における有舌尖頭器の生産と供給を理解するうえで興味深い。

以上を踏まえると、北の城遺跡に基部U字状尖頭器を

残した集団は、それらを下呂石の原産地周辺で準備したうえで、天竜川流域まで持ち込んだ可能性が高い。彼らは、将来的に柳又型有舌尖頭器を完成させることを念頭に置いたうえで、それらを運搬していたことが窺い知れる。一般に、柳又型有舌尖頭器を携えた西日本の集団は、飛騨山脈や木曾山脈を越えた地域まで到達する機会は乏しく、これは下呂石の広がりに関しても同様である。この意味では、西日本の集団が本来の活動範囲を越えて天竜川流域まで到達し、その結果として、これらの石器群が残されたと考えられる。彼らが御嶽山の南北いずれの地域を経由してこの地に到達したのか、現時点では情報が乏しく不明なままである。いずれにしても、北の城遺跡の石器群は、推定で100km以上の距離に達する集団のダイナミックな貫入を物語っている可能性が高い。

これらの基部U字状尖頭器がいかなる理由で天竜川流域に残されたのか、この問題を考えるにはあまりにも情報が限られている。もちろん、北の城遺跡の4点の尖頭器が居住者のツールキットのすべてとは考えにくく、実際には未成品や完成品を含めてより多くの石器が存在していたと想定される。それらが本遺跡に残されることなく、次の遺跡へと持ち越されるなかで、一部の尖頭器が遺棄されたと考えるのが自然である。残念ながら関連する石器群がほとんど発見されていない状況にあって、推測に推測を重ねることは適切ではない。拙速に特定の結論へと導くのではなく、さらなる資料の蓄積を待つ慎重に検討すべきである。現時点では、柳又型有舌尖頭器に特徴づけられる西日本の集団がブランクを携えて当地を訪問し、それほど長く滞在することなく、それらの一部を本遺跡に残した可能性を予測しておきたい。

5. おわりに

本論では、長野県松川町・北の城遺跡から出土した下呂石製尖頭器4点を起点として、それらが天竜川流域に残された経緯について議論を展開してきた。現時点では類似資料は限られているが、いわゆる神子柴系石器群の範疇で理解されるものではなく、むしろ柳又型有舌尖頭器のブランクと評価することが可能であった。当該石器群を携えた集団はこれらのブランクを運搬し、原産地から遠く離れたこの地に残したと結論付けられる。一般に、当該石器群を携えた集団は西日本を中心に展開しており、飛騨山脈や木曾山脈を越えて東日本に及ぶ機会に限られている。それにもかかわらず、北の城遺跡の石器群は、これらの山脈を越えた異集団の侵入があったことを示唆している。日本列島の東西に異なる石器群を携えた集団が広がるなかで、まさしく東西の集団が空間的に交錯する姿を物語っていると言って良さそうである。

同時に、このことはこれら東西の集団が必ずしも均質な石器製作のパターンを採用していなかった可能性を示唆している。一般に、隆起線土器群の段階を迎えると、ベーリング・アレレード期の急速な温暖化に呼応して、狩猟採集民を取り巻く資源環境は大きく変化することに

なる。こうした環境変化に呼応して、彼らはそれ以前の行動戦略を大きく再編し、縄文時代に特徴的な生活に向けて、最初の重要な一歩を踏み出すわけである。とくに、この時期の狩猟採集民は半径5km程度の小地域(microregion)を形成し、そこで集約的な資源開発を展開するようになる。必然的に、彼らは在地の石材資源に大きく依存し始め、それに対応して石器生産の技術基盤も大幅に再編していった。こうした方向性は日本列島の広い範囲で基本的には共有されていたと考えられるが、東西日本の地域差をどのように理解してゆくかは今後の課題として残されている。

すでに本論で述べたように、柳又型有舌尖頭器を携えた集団は、大枠では在地の石材に依存しつつも、しばしば遠隔地の石材を取り込んでいた可能性がある。北の城遺跡の事例を敷衍するならば、彼らは原産地の周辺でブランクを生産し、将来的な加工を見越して遠隔地まで運搬していたと考えられる。このことは上黒岩陰遺跡において安山岩製の有舌尖頭器が活発に生産される反面、その完成品が限られている点と補完的な関係にあったことも想起させる。こうした推論の是非はともかく、上述した大和高原の桐山和田遺跡でサヌカイトに重きを置いた石器生産が進められている点は無視できない。時期的な切り分けの問題はあるにせよ、サヌカイト製の素材剥片が土坑内に集積されて発見された点は、遠隔地に向けた石材供給の一断面を示している。本論で議論する余力はないが、将来的な検討課題として提示しておくことにしたい。

謝辞

本論の作成にあたって、以下の方々にご教示、ご協力を賜った。末筆ながら記して感謝する次第である。

安藤広道、池谷信之、市澤英利、上峯篤史、小林正春、塩原 健、杉山拓己、鈴木朋美、高草木和佳子、田部剛士、橋詰 潤、深澤太郎、水野敏典、光石鳴巳、米山 梓(50音順)

引用文献

- 上峯篤史 2011「石器群の一括性と風化度—大阪府東大阪市神並遺跡出土の有舌尖頭器をめぐって—」『文化史学』67: 115-134
- 上峯篤史 2018『縄文石器: その視角と方法』, 312p., 京都, 京都大学学術出版会

- 氏家敏之 2008「四国地域の有茎尖頭器—高知県不動ヶ岩屋洞窟出土資料の再検討—」『旧石器考古学』22：21-29
- 小林達雄編 1988『小馬背遺跡：國學院大學文学部考古学実習報告15』, 國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1989『小馬背遺跡1989：國學院大學文学部考古学実習報告17』, 國學院大學文学部考古学研究室
- 齊藤基生 1993「下呂石—飛騨・木曾川水系における転石のあり方—」『愛知女子短期大学研究紀要（人文編）』26：139-157
- 田部剛士 2011「押型文前半期における石器の様相—大和高原の層位的傾向から—」『押型文土器期の諸相』関西縄文文化研究会編, pp.20-42, 向日
- 田部剛士 2013「東海・近畿地方における石器群の変遷—縄文時代草創期から早期初頭—」『環境変化と人類活動—更新世から完新世への移行と東海地方の石器群—』考古学研究会東海例会編, pp.47-68.
- 堤 隆編 2009『小鍛冶原／唐沢B』, 68p., 長野, 信毎書籍出版センター
- 中川 明編 1997『粥見井尻遺跡発掘調査報告』明和, 三重県埋蔵文化財センター
- 西口陽一 1991「近畿・有舌尖頭器の研究」『考古学研究』38(1)：86-106
- 浜田重人 1994「高松市木太町大池遺跡採集の有舌尖頭器」『香川考古』2：36-38
- 林 茂樹編 2008『神子柴』, 331p.+85p., 長野, 信毎書籍出版センター
- 春成秀爾・小林謙一編 2009『愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告154, 620p., 佐倉, 国立歴史民俗博物館
- 藤山龍造 2020「縄文時代草創期の無文土器群とその位置づけ」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会編, pp.209-222, 田川
- 松田真一 1998「近畿地方における縄文時代草創期の編年と様相」『奈良県橿原考古学研究所論集』13：1-29
- 松田真一編 2002『桐山和田遺跡』橿原, 奈良県立橿原考古学研究所
- 松室孝樹編 2014『相谷熊原遺跡I』大津, 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
- 光石鳴巳 2008「近畿地方における有茎尖頭器の基礎的研究」『旧石器考古学』70：11-20
- 宮崎哲治編 2006『前田東・中村遺跡Ⅲ』高松, 香川県埋蔵文化財センター
- 宮沢恒之・市沢英利・小林正春・伴 信夫編 1972『家の前・北ノ城遺跡』松川, 建設省飯田国道工事事務所・長野県下伊那郡松川町教育委員会
- 村上泰樹・久保弘幸編 1991『国領遺跡発掘調査報告書』神戸, 兵庫県教育委員会
- 山本直人 1992「縄文時代の下呂石の交易」『名古屋大学文学部研究論集』113(史学38)：83-104
- 矢島國雄・大竹幸恵・大竹憲昭・金井拓人・池谷信之 2024「シーボルトによる日本の鉱物コレクション中の黒曜石器の現状調査と原産地推定」『資源環境と人類』14：115-129
- 矢野健一 2013「近畿地方における縄文草創期の土器編年」『立命館大学考古学論集』6：1-10
- 綿貫俊一 2009「上黒岩遺跡出土石器」『愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告154, 国立歴史民俗博物館編, pp.428-477, 佐倉, 国立歴史民俗博物館

Technological implications of bifacial stone points made from Yugamine rhyolite: A case study from the Kitanojō site in Central Japan

Ryuzo Fujiyama^{1*}, Takashi Tsutsumi²

Abstract

This study examines the technological attributes of bifacial stone points from the Kitanojō site in central Japan to explain patterns of lithic production and inter-site technological relationships during the transitional phase between the Paleolithic and Jōmon periods.

Despite limited academic attention, the four bifacial points provide insights into prehistoric lithic technology. Each specimen, which exceeded 100 mm in length, was recovered in close proximity; however, associated manufacturing by-products were conspicuously scarce. These specimens were exclusively made from Yugamine rhyolite (commonly known as “Gero stone”), despite the site’s location being on the periphery of its primary distribution range. Moreover, unlike typical leaf- or willow-shaped bifacial points with extensively worked surfaces, these were minimally retouched bases with U-shaped outlines, reflecting distinctive technological and morphological characteristics.

The study aims to clarify the chronological position and functional nature of these bifacial points. All four were produced from obliquely struck flakes, indicating technological uniformity, while some exhibited a distinctive oblique parallel retouching. This feature suggests that the specimens may represent unfinished blanks of tanged points (Yanagimata type), presumed tools associated with the possible establishment of projectile technology, rather than fully finished implements. Such an interpretation situates the assemblage within the Bølling–Allerød interstadial, a period marked by significant cultural and environmental transitions.

From this perspective, the study argues that lithic production and inter-site dynamics in western Japan during the Incipient Jōmon period cannot be explained using models derived from eastern Japan. As hunter-gatherer territories contracted during the interstadial period, local resources became increasingly central to lithic production. However, the artifacts suggest that the blanks of tanged points made from Yugamine rhyolite may have been transported over long distances and supplemented with locally available materials. Thus, these bifacial points offer a concrete glimpse into the logistical and technological dynamics of this transitional phase.

Keywords: Japanese archipelago, Jōmon period, Bifacial points, Lithic technology, Mobility strategy

(Received 9 December 2025 / Accepted 3 February 2026)

1 School of Arts and Letters, Meiji University, 1-1 Kanda Surugadai, Chiyoda, Tokyo, 101-8301, Japan

2 Centers for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 1-6-3 Kanda Saeugakucho, Chiyoda, Tokyo, 101-8301, Japan

* Corresponding author: Ryuzo Fujiyama (fujiyama@meiji.ac.jp)

